



ファインスチール

Summer 2011

夏



CONTENTS

01 特集1

第9回 金属サイディング

施工例写真コンテスト

05 ファインスチールを使った 建築設計例 298

Winding W

外から内へつながる壁 ——

設計：駒田 剛司 + 駒田 由香

09 板金工事に関する用語集その17

11 建築めぐり

テーマ建築 5 丸山雅子

13 街でみかけるファインスチールの施工例 その7

一般社団法人 日本鉄鋼連盟

第9回 金属サイディング 施工例写真コンテスト

(主催：日本金属サイディング工業会 後援：一般社団法人 日本鉄鋼連盟)

日本金属サイディング工業会が一般社団法人 日本鉄鋼連盟の後援により、平成22年7月1日～10月31日に実施した「第9回金属サイディング施工例写真コンテスト」について、ご応募いただいた施工例の写真を中心にをご紹介します。



織田 昌弘さん(代表)

外観については、基本コンセプトのイメージを表現する素材として金属、ガラス、コンクリートを用い、その素材感を生かす材料として、耐久性や断熱性の良さから金属サイディングを採用しました。今回このような賞を頂き、突然のことで大変驚いているとともに、大変光栄に思っています。

新築部門 最優秀賞

創設計室 (福井県)

御施主様の描く「黒と白、大きなすりガラスの窓」という建築イメージと、シンプルなデザインを基本コンセプトに設計をしました。

●江口特別審査委員のコメント

「空に向かって咲く家」とでも申しませうか？巨大な花を想い浮かべました。とにかく解放感と、明るさに満ちた家です。これだけ大規模で、斬新な形状のデザインですが、まわりに威圧感を与えないのは、サイディングの落ち着いた色合いと、微妙な影を作るテクスチャーによるところが大きいのと思います。車庫の上のリビングと思われる空間は、中に行くとどんな風景が現れるのでしょうか？庇を斜めに落とした玄関も、斬新でありながら違和感を感じません。太陽の影を愉しみ、花のようなモチーフを建物全体に表現して自然と一体化することができた、サイディングのまた新しい可能性を引き出した素晴らしい作品となりました。



●杉田特別審査委員のコメント

屋根から外壁にかけての幾何学的な形状と、玄関廻りのちょっと不思議な庇とデザインが、たいへんに強く印象に残りました。今回の施工例コンテストでは、東日本よりも西日本からの作品の方が、デザイン的に魅力のあるものが多かったように感じましたが、その中から、この作品を最優秀とさせていただきます。特に玄関庇廻りについては、実際にどうなっているのだろうかとか、是非見てみたいなど思いました。ただ一つ残念なのは、傾斜する外壁に無関係に雨樋が取り付けられていて、少々デザインを損ねています。傾斜する外壁に沿った縦樋として、雨樋の存在が気にならないデザインとしていただければ、今以上の作品になっていたかなと思います。

金属サイディング施工例写真コンテストは、日本金属サイディング工業会加盟8社が、全国の設計事務所・工務店・板金店の協力を得て、金属サイディング普及活動の事業として実施しているもので、第9回は全国から1,326作品の応募がありました。新築及びリフォームで建物の外装に金属サイディングを使用したものを対象とし、新築では建物の意匠性・高級感・コーディネート感覚など、トータルでバランスのとれた作品、リフォームでは『施工前⇒施工後』で優れたイメージアップの見られる作品を審査委員会で選考しました。その結果、最優秀賞2作品（新築・リフォーム各1件）、優秀賞は10作品（新築6件、リフォーム4件）、入選賞50作品（新築30件、リフォーム20件）が選ばれました。

[審査委員会]

- ・特別審査委員 江口恵津子（㈱ヴェルディッシモ代表取締役、インテリアコーディネーター）
- ・特別審査委員杉田宣生（一級建築事務所HARUハル建築研究所）
- ・当会審査委員（理事・幹事・技術委員・事務局）



リフォーム部門 最優秀賞

(株) Hand Made (北海道)

落雪の問題を解消するために、玄関上の屋根を片側三角屋根から平らな屋根に変更いたしました。見た目もシンプルでシャープさを活かすために、排雪パイプ・出入口など細部にわたって、見えないところにもこだわっております。また、こだわりのウッドデッキは、排雪が出来るように全面が扉になっており、極力扉として見えないように工夫しております。



板垣 政人さん(営業部 部長)

全体のバランスを考えるために、形状・色について何度も打ち合わせを重ね、お客様にご満足いただくことが出来たことが、当社の誇りです。今後も、お客様との出会いを大切に、多様面からのバランスを考え、お客様にご満足いただける施工を目指してまいります。

●江口特別審査委員のコメント

デザイン自身は、玄関の風除の屋根部分を変えているだけですが、この三角がとても印象的なものになりました。外観正面の高さも三段階になり斜めのラインも綺麗です。ただ、色を変えるだけのリフォームから、もう一步、ちょっとした形状の変化で、もともと良い外観デザインを、機能も高めながらより一層レベルアップしているという、サイディングならではの素晴らしい作品ですね。スタイリッシュな空間の中に、デッキでは木のイメージを出していることが、この家の優しさ、楽しさを伝えており、異素材を取り入れるサイディングの器の大きさを感じます。

●杉田特別審査委員のコメント

基本は外壁の張り替えですが、これに伴って玄関アプローチ上部の壁を立ち上げてフラットな屋根とし、駐車場の上部にデッキを設けたことで、2階建て部分から玄関上部、デッキへと、改修前のデザインから大きく印象を替えることに成功した作品だと思います。外壁の色使いもメリハリがきいてとても良いと思いますし、新たに設けたデッキは、家族の皆さんの生活の幅を広げてくれるに違いありません。リフォーム部門では、なるべく、大がかりな増改築をした作品からではなく、外壁の張り替えによってリフレッシュさせた作品の中から選ばせていただこうと思っているのですが、今回の作品は、張り替えにちょっと工夫を加えた好作品であると思います。



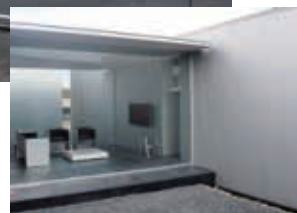
新築部門 **優秀賞**

(有)竜建 (群馬県)



新築部門 **優秀賞**

(株)ワークキューブ (愛知県)



新築部門 **優秀賞**

(株)クレディス (福岡県)



新築部門 **優秀賞**

(株)嘉賀工務店 (福岡県)



新築部門 **優秀賞**

(株)嘉賀工務店 (福岡県)



新築部門 **優秀賞**

(株)ライト設計 (熊本県)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)ハートフルホーム (北海道)



リフォーム部門 **優秀賞**

(有)アルファトヨタ (青森県)



リフォーム部門 **優秀賞**

(株)寺林板金工業 (富山県)



リフォーム部門 **優秀賞**

ミサワホーム富山(株) (富山県)





ファインスチール
を使った

建築
設計例

298

Winding W

外から内へつながる壁

設計：駒田 剛司 + 駒田 由香

『Winding W』は市の中心から少し離れたところに建つ、作曲家夫妻のための住宅である。

区画整理された住宅地の一戸建てやアパートがまばらに混ざる中に、この住宅は計画された。一枚の壁がうねりながら折れ曲がり、数個の空間を形成しているダイナミックな構成。ソリッドな黒い壁と白い屋根が、シャープな印象を与えつつも周辺の住宅ともなじんでいる。

施主の生活は東京が主体ではあるが、施主・奥様のご実家が共に

つくば市の近くであったことから、実家にも夫婦の仕事場にもアクセスしやすいこの地を選んだ。設計者の駒田夫妻は施主の友人や家族が車で訪れることが多いことや、車や自転車等の趣味に配慮し、敷地に対して余裕をもった配置計画を行い、建物の随所に様々な配慮を施しながら、施主の生活が家族と隔絶せず、かつしっかりと作業できる環境が整えられるような住宅を目指した。

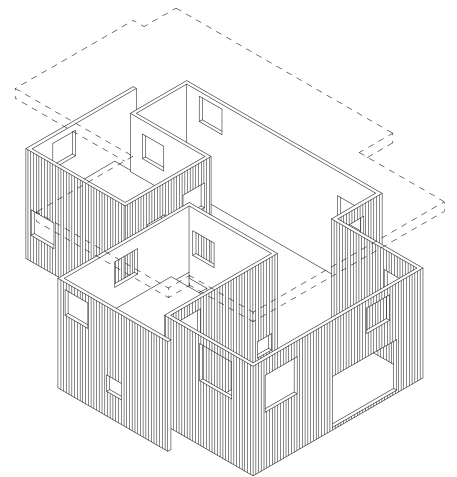
周囲には柵などのないオープン

な住宅が多く立ち並んでいる。設計初期は施主も駒田夫妻も平屋のイメージで設計を進めていたが、周囲の住宅環境や敷地面積から、住居自体は広くはないが半二階のような高さのある空間にすることで、よりつながりのある空間ができ、周辺環境に合った建築になるのではないかと考えこのボリュームに至った。こうした綿密な敷地への配慮と、施主への配慮、そして駒田夫妻と施主の住居に対する思いからこの形は生み出された。



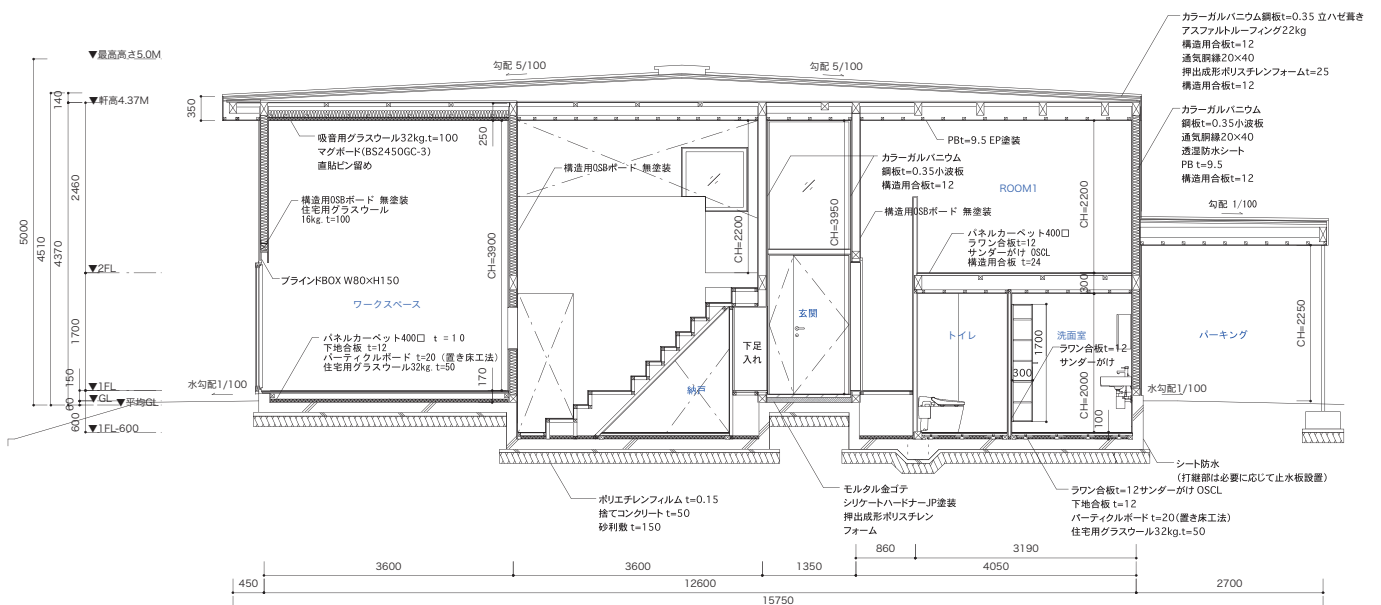
折れ曲がる壁の連続

設計当初、ワークスペースやホールが基本的にはつながっているが、それぞれのまとまりがある空間を施主は求めた。駒田夫妻はそのコンセプトと、「バラックのようなものでいい」という施主の考えを基に、スタディ段階では一個一個の円弧が各部屋を形作り、お互いが回り込んでいくような案で検討していた。しかし、“つながっているけどそれぞれのまとまりがある”というコンセプトを、施主の空間感覚を尊重しながら突き詰



めていった結果、一枚の壁が折れ曲がり、空間を形成するという案になっていったという。

撮影（全カット）：傍島利浩



街のような空間の 創出

駒田氏は「一筆書きのようなひとつながりの壁を採用することで空間が閉じず、必ずどこかで開かれた空間を作ることができる予感がしていた」と語る。ひとつながりの空間は緩やかにつながり、構造壁の入隅部分にはOSBボードをあしらい、出隅部分は外壁のガルバリウム鋼板をそのまま採用した。この意匠により作曲用のワークスペース、ホール兼リビング、キッチンは壁に囲まれた部屋でありながら、ガルバリウム鋼板の建物の並ぶ街のような錯覚を抱く、不思議な空間が創出されている。

壁両端部の箱状に包まれた空間は半地下の1階部分と通常の2階よりも低い、1.7層ともいえる構成となっており、通常の2層吹き抜

けのある住宅とは異なる、距離感の近い空間にすることを重視したと駒田氏は語る。

床仕上げはワークスペース、キッチン、ホールで異なり、各々の部屋を分節しているが、外部のように錯覚させる感覚が、空間の隔たりをうまく打消し、全体としての統一感を与えている。窓の形状に関しても非常に繊細な配慮がなされており、同じ内部の開口でも、OSBボード部位に現れる開口の見附は薄くし、存在感を消している。ガルバリウム鋼板部位の窓の見附は外壁側のアルミサッシと同じ寸法を採り、外部空間のような印象を強調させている。

2階部分の出窓から階下を眺めると、あたかも外部の広場のよう感じさせる空間になっている。箱ようになったこの2階部分には別々に階段がつけられており、どの場所からもお互いが見える近

さにあるが、行き来するには少し遠い、という空間的な面白さを持っている。こうしたスケール感の調整と、平面計画のバランスを保つことに注意を払った、と駒田夫妻は語った。

ガルバリウム鋼板の 可能性

『Winding W』はガルバリウム鋼板を内壁に使っている、という点でこれまでの住宅とは一線を画す。内壁としてのガルバリウム鋼板はコストパフォーマンスや形状の豊富さだけでなく、恒久性、維持管理の容易さが他の仕上げよりも良いなど、様々な利点がある。駒田夫妻は「ガルバリウム鋼板の中でもニュートラルな質感の小波板は、鉄としてのリアリティを引き出し、また樹木やOSBボード、畳の繊細さとも合う」と考え、こ





ウム鋼板を使っている。細かい部分を設計する際には、波板の波を合わせ、壁の末端部を少し外に延長させることで、外から内に入り込む構造壁を強調するといった細やかな工夫がなされている。風通しに関しても神経を使い、高低差を利用したわずかな間隙を設け、内部に配置された数々の開口部を通したことで、内部の風環境が悪い空間はなくなったという。

現在、この住宅は施主によって

植栽が植えられ良い環境となり、設計時の期待以上に完成後の方が喜んでいいるという。引越してきた当初に訪れた周辺住民もこの住宅に好印象で、今もよい交友関係を築けている。

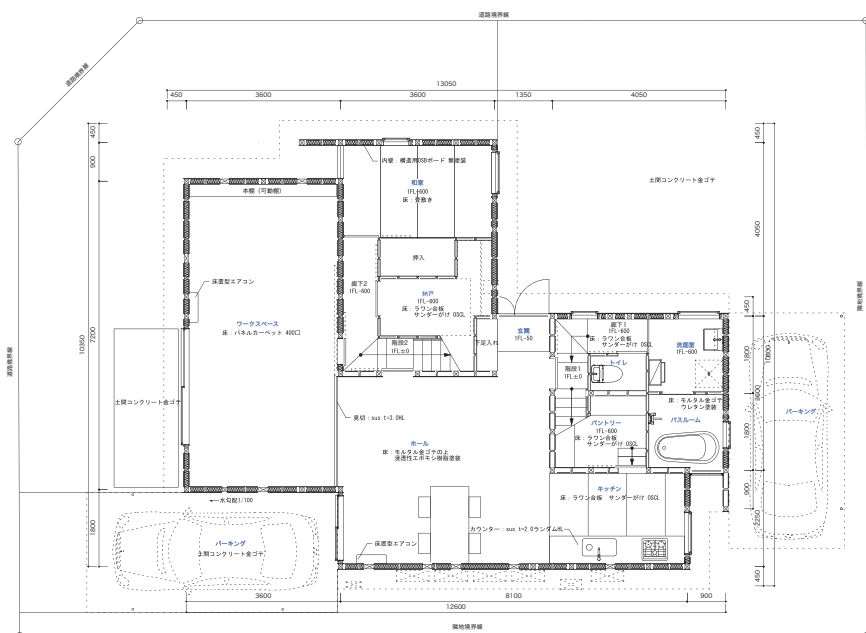
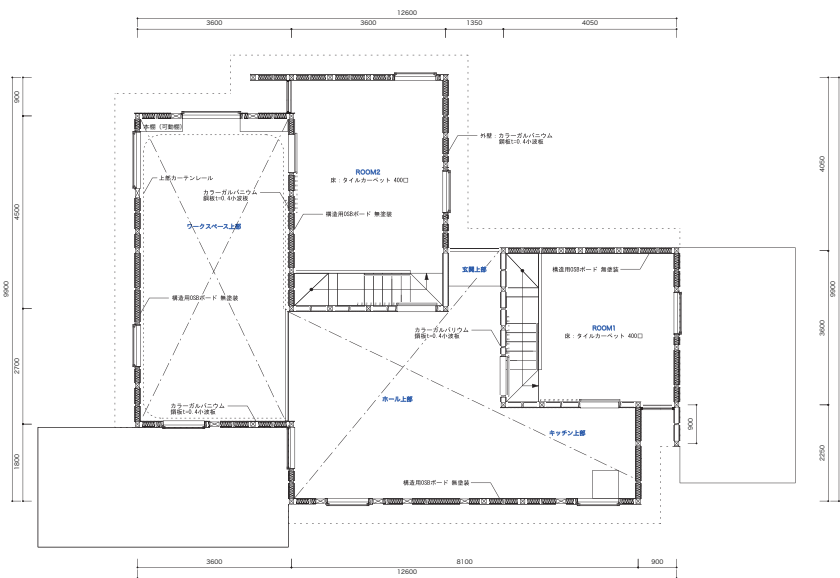
つながりと外部のような雰囲気重視したこの建築は、これからの新たな家族のつながり方、街という概念のもつ豊かさを想起させる家であるといえるのではないだろうか。

れまでも数多くの作品に採用している。今回は特に細かいところにも合わせて使ったことで、洗練されたインテリア材のような雰囲気が醸し出されている。「今回の建築で自分たちのガルバリウム鋼板に対する考え方が変わった。これまでのような単純な外壁材としてだけではなく、新たな使い方の可能性が広がったと感じている」と駒田夫妻は語る。今回の設計では、施主もガルバリウム鋼板の使用に積極的で、自らもガルバリウム鋼板を使用した住宅を見て回り、好みの色を提示してくれたという。

今後に関して「ガルバリウム鋼板は白、銀、黒のイメージが強いが、特注色や光触媒塗装などがより普及して安く発注できるようになれば、設計の幅が広がるかもしれない」と駒田夫妻は語った。

外と内との連続性

この住宅は外と内の連続性にこだわり、内装の細部にもガルバリ



設計：駒田 剛司 + 駒田 由香（有限会社 駒田建築設計事務所）

有限会社 駒田建築設計事務所 / 〒134-0088 東京都江戸川区西葛西 7-29-10 西葛西アパートメント 401

[tel] 03-5679-1045 [fax] 03-5679-1046 [e-mail] komada@ppp.bekkoame.ne.jp [URL] http://www.komada-archi.info

レポーター：東京大学 大月研究室 高橋 忠輝(M2) 栗野 悠(M1)

① 尾垂 [おだれ]

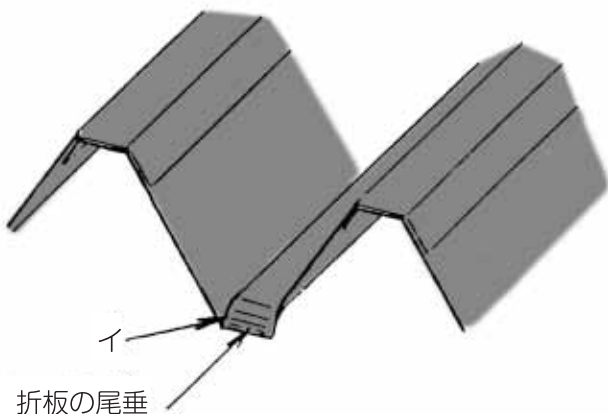
尾垂とは元々軒先部分でたる木の先端を隠すために取り付けられる板を指した呼び名で、鼻隠しとほぼ同じもののようです。

また三重、滋賀や奈良県辺りでは、軒先から少し内側に入ったところから板をほとんど垂直に下げて取り付け雨除けとする方法が見受けられますが、この板をオダレと呼んでいるようです。ついでですが、この種の板を地方によっては鎧板とか軒垂れ、または単にサガリとも呼ぶことがあります。

金属屋根材の場合は、上の形よりかなり変わった尾垂となります。図のように屋根材の底先端部の15～20ミリの範囲を、角度15～30度程度に下側に曲げて尾垂とします。

尾垂を付けることによって雨水は屋根面から確実に排出することができます。もし尾垂がないと、雨水は屋根材の底裏面を伝わって室内にまで達することすらあります。

さらに、尾垂があると軒先部分の板の腐食に対しても非常に有効です。ある塩ビ鋼板で葺かれた屋根の例によると、同じ仕様で同時期、同地域に施工されたにもかかわらず、尾垂がない屋根板は軒先から100ミリも腐食していましたが、尾垂を付けた屋根板は尾垂部分だけが少し腐食していました。この例の両者の腐食進行度合いはおよそ1：5といえるでしょう。なお、尾垂を付けるときの図のイ部分を切断しないことが肝要で、若しこの部分に鋏を入れますと尾垂効果を大きく損ないます。



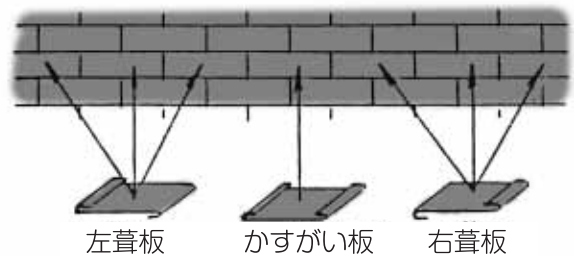
② 鋳 [かすがい]

鋳は木造の建物でよく見掛ける接合用の金物です。コの字形をして、木材に打ち込みやすく両方の先が尖っています。

ところが屋根の世界にもかすがいが使われています。一文字葺きの屋根を葺くとき葺板を縦馳で継ぎますが、そのまま何枚も継ぐと板の温度伸縮のために一部の葺板がむくり上がったり、縦馳が外れたりすることがあります。葺板は1枚づつになっていますが、縦と横の馳がガッチリと組み合っているため、1枚板とほぼ同じ状態になるからです。

そこで、図のようにかすがいを入れます。かすがいは「かすがい板」というのが正しいでしょう。通常かすがい板は、5～6mの間隔に設けられています。なお図のかすがい板は、馳が上に向いているので「上かすがい板」といいますが、馳が下向きとなったものもあり「下かすがい板」といっています。

かすがい板は温度伸縮に対する他、縦馳の方向を変える場合にも用いられます。



③ 落口 [おちくち]

屋根や雨樋の底を流れる雨水を、軒樋や縦樋に導くために設ける孔を落口といいます。また流し台の排水口や汚水排水の出口なども落口といいます。

例えば屋根が折板葺きの場合、折板の底に円い孔を明け、そこから雨水を樋に落とします。

このときのポイントは落口周囲を水が流れる方向、つまり下向きに折曲げて、水がスムーズに流れるようにします。この下向きに折曲げた部分を「尾垂れ」ともいいますが、もし尾垂れがないと雨水の一部が、折板底の下面を横に走ります。勾配の小さい折板葺

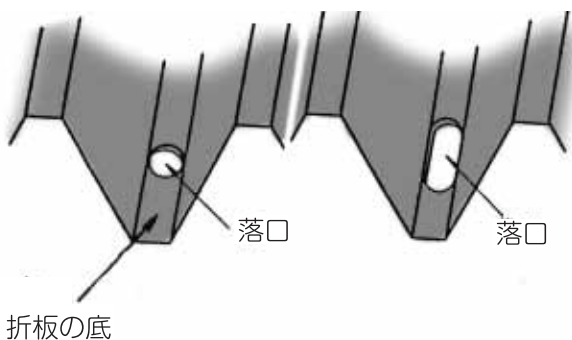
きの場合は、この水は室内にまで達して雨漏りする
と同じ結果にさえなることがあります。

また尾垂れは孔周囲がすべて連続していることが大
切で、一部でも切れているとそこから水が折板底に
向かい完全な排水が出来ません。

尾垂れの寸法は理想的には15mm程度のように
すが、施工が困難になるため10mm程度が一般的
です。

ついでに、落口の周囲に尾垂れがないと、折板の強
度が落ちます。従って風や雪のため折板を折損す
る原因となります。

雨樋の落口は、あんこう、上合や集水器などと称す
る部材があって、上で説明したと同様なメカニク
で作られています。



4 吊子 [つりこ]

吊子は屋根材、壁材や役物の下地への固定に用いる
部品です。従って当然のことながら相応する強度が
要求されます。

もちろん吊子は、取り付ける部材の形状寸法に適し
たものが必要となります。

例えば一文字葺きや役物に用いる吊子は屋根板や役
物板と同じ板を、幅30mm、長さ100mm弱の小片板
で用います。

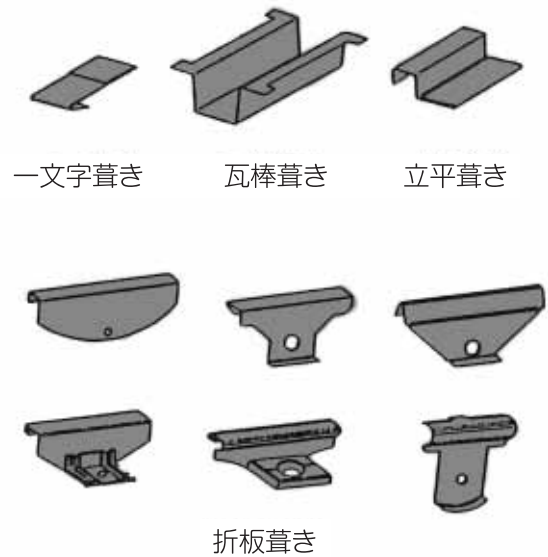
また心木なし瓦棒葺きはハット形の短い吊子か、長
い通し吊子となります。

馳締め形折板の吊子は、厚さ1.0mm程度の板をプレ
ス加工して作られます。なお折板の吊子は特に固定
金具と呼ばれています。

吊子は一端を屋根、壁材や役物の馳に引っ掛け、他
端は下地に釘、ボルトなどで止められます。屋根材
の場合の吊子の強さは、主に風による吸引力（負荷
重といいます）に十分耐えなければなりません。

一文字葺きの場合は、1個当たりの強さを上げるこ
とは工法上不可能なので、その場合は単位面積当た
りの吊子の数を増やして対応します。

また折板の場合は、折板に加わる予想最大荷重を基
に形状寸法や仕様が決定されます。



5 枅 [ます]

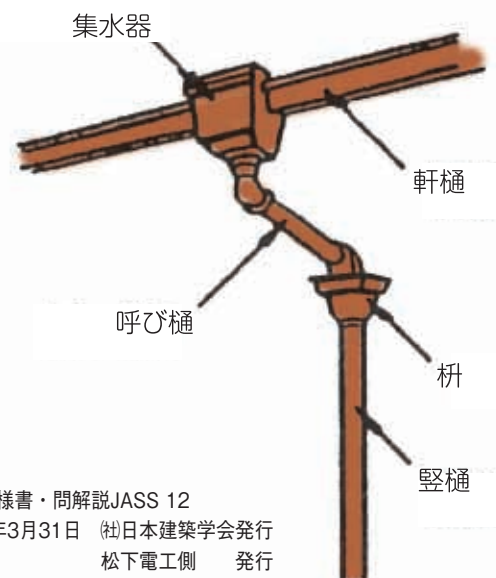
縦樋の頂部に取り付けられた、方形か長方形の箱状
の部材を「枅」といいます。また「桝」の字を当て
ることもあります。

使用する位置関係から見ると、軒樋と縦樋の接点で、
雨水の流れが変わる箇所で一種のバッファの機能
と、樋内部の掃除を容易にする機能もあります。

ビルの屋上の雨水を排出する縦樋の頂部には、蓋を
開閉できて掃除のし易い枅を付けるのが普通です。

また、呼樋と縦樋の接点部に設けて、雨水の流れ方
向と水量を調整する枅があります。特に2本の呼び
樋が集まる場合の枅のことを「寄枅」といい、なく
てはならぬ枅です。

なお枅に装飾的に作られたものを「飾り枅」とい
います。



【参考文献】
建築工事標準仕様書・問解説JASS 12
屋根工事平成2年3月31日 (社)日本建築学会発行
樋の技術資料 松下電工 発行

テーマ建築⑤

最後の家

工学院大学建築学科
藤森研究室

担当 丸山 ^{もとこ} 雅子

この春まで私は漫画家の水木しげるさんと同じ町に住んでいて、水木さんの生前墓も近所にあった。寺の墓地に入ると、それがどこにあるかはすぐにわかる。ねずみ男や鬼太郎似の石像が門柱に乗り、三方を囲むレリーフに妖怪たちがひしめいている。いかにも水木さんの墓だ。水木さんを偲ばずにはいられない。当人はまだそこにいないのに、自然とそう思ってしまう。墓として見事ではないか。

墓は最後の家とも言う。ならば建築家にぜひ手本を見せてもらいたい。ところがほとんどの建築家は自邸には夢や理想やこだわりがあっても、死後の家には関心がないようだ。私はこれまでに50人以上の建築家の墓を訪ねたが、これはと思うものは少ない。



図1 伊東忠太が設計した墓

左：伊東忠太(1954年没)の眠る伊東家之墓(1940年、總持寺)
右：佐藤功一(1941年没)の眠る佐藤家之墓(1941年、染井墓地)
伊東家之墓は墓には珍しい大谷石製で、保存状態が悪い。そこかしこ崩れている。

墓を家になぞらえると、墓地は住宅地、墓所は土地、墓石は家屋に相当する。墓所は家族単位で使用され、代々承継される。一つの墓石に一人単独で眠る場合もあれば、夫婦の場合、何人かまとめた場合がある。ただし墓所は通常借地で、墓石は動産で

ある。そしてほとんどの場合石造である。擬石やコンクリート、タイルが使われることもあるが、それでも「墓石」というように基本は石である。

最終的に石造の家に落ち着くとは、伊東忠太の「建築進化論」を連想してしまう。その伊東忠太は「墓の建築家」と呼んでもよいほど、生涯に数多くの墓を手がけた。1941年に出版された彼の作品集には、墓に分類された13作品が図版つきで掲載されている。これほど多くの墓を作品集に載せた建築家が他にいるだろうか。その13作品のうち5件までが川崎市の總持寺にあり、忠太(1954年没)自身の眠る伊東家之墓(1940年建立)が一番変わっている。なんと大谷石でできているのだ。



図2 建築家が設計した個性的な墓

左：武田五一(1937年没)の眠る武田家累代之墓(1913年、勝林寺)
右：小尾嘉郎(1974年没)の眠る小尾家之墓(1933年、多磨霊園)
小尾の墓は、小尾の代表作である神奈川県庁舎(1928年)を髣髴させる。

墓石には硬く、水はけがよく、キメの細かな石が適していることは常識である。大谷石はその条件にことごとく反している。そのせいで伊東家之墓の現在の状態はかなりひどい。まるでどこかの遺跡のようだ。正面の外柵が失われているのは、崩れて危ないので撤去されたのだろう。翌年彼は教え子の佐藤功一(1941年没)のために佐藤家之墓(1941年、染井墓地)を設計しているが、こちらは普通に花崗岩で作られているので状態は良い。自分の墓だからこそ、あえて不向きとされる石を試したのだろうが、なぜだろう。もっとも忠太の墓が遺跡みたいだというのは、それはそれで味がある。それを狙ったわけではあるまいが。

ちなみに總持寺には5件の墓の他に、大僧堂や放光(ひかり)観音像台座も忠太の作品である。近くに、教え子で早稲田の同僚でもあった吉田享二が眠っているが、こちらは明石信道の設計である。また本堂(大祖堂)は内藤多仲の作品である。つまり忠太は

自分の作品と、クライアント達と教え子と、その作品に囲まれて眠っていることになる。墓を墓石や墓所に限らず周辺まで広げて見ると、忠太の墓は何と賑やかなことか。

建築家が自ら設計した墓にはどこかしら個性があって良い。例えば内藤多仲（1970年没）の内藤家之墓（1935年、多摩霊園）は一見普通の洋型墓だが、戦前にクリスチャンでもないのに洋型墓とは変わっている。おそらく、従来の和型では棹石が地震で倒壊しやすいので、耐震性を考えてのことだろう。墓石脇の灯籠も背が低い。

デザイナー系の建築家が設計した墓にはさらにはっきり個性が表れている。武田五一（1938年没）の武田家累代之墓（1913年、勝林寺）は斬新である。小尾嘉郎（1974年没）の小尾家之墓（1933年、多磨霊園）は、小尾の代表作の神奈川県庁舎（1928年）を髣髴とさせる。その斜め前の吉阪隆正（1980年没）の吉阪家の墓所（1959年）は、従来の墓の型にとられない自由なデザインで、外柵が無く、墓所というより小広場の雰囲気である。



図3 元お雇い外国人ウォートルス兄弟の墓所
米国コロラド州デンバーのフェアモント墓地にある。左奥に見える小さな墓石が、日本で建築家として活躍した長兄トーマス（1898年没）の墓。手前の大きな墓石は、末弟アーネスト（1893年没）の墓。

建築家にはぜひ自分で墓を設計してほしい。個性溢れる墓の前に立つと、その人に会えたような気がする。そうでないと、どうもピンとこない。

米国コロラド州デンバーに元お雇い外国人のウォートルス兄弟の墓所がある。三人の兄弟、トーマス、アルバート、アーネストのうち長兄のトーマスが、大阪の造幣寮や銀座煉瓦街の建設など、日本の近代建築史上に大きな足跡を残したウォートルスである。三人は日本を離れた後、米国コロラドに

拠点を移し鉱山業に従事した。デンバーの墓所には、1892年に服毒自殺をした末弟アーネストの妻がまず葬られ、翌年アーネストがその後を追うように悲劇的な事故死を遂げると、遺された兄たちによってアーネストのために大きく立派な墓石が建てられた。しかしその5年後に亡くなったトーマスの墓は小さい。アーネストの妻の死の辺りからウォートルス兄弟の事業は下り坂になるとはいえ、トーマスの墓はあまりにそっけない。むしろアーネストの墓の前に立った方が、兄たちの無念が伝わってくる。

一つ救われるのは、ウォートルスの墓所を含む周辺一帯がきれいに管理されていることである。気候が乾燥していることと、墓所が区切られず開放されているので、管理しやすいのだろう。日本ではとてもこうはいかない。住む人がいないと家が荒れるように、訪れる人がいないと日本の墓はすぐに荒れる。そして誰も来なくなり、無縁墓に認定されると、最後の家から追い出されてしまう。

歳月が経つと次第に墓参は少なくなる。おまけに昨今は、寺務所や管理事務所で墓の位置を尋ねても、個人情報保護を理由に教えてもらえないことがある。「現在の名義人に聞け」の一点張りである。墓参希望者を門前払いとは、無縁墓を増やす気だろうか。墓から漏れて困る個人情報とは何だろう。墓の故人情報ぐらいはむしろ積極的に公開して欲しい。

墓は最後の家で、永遠の家である。墓の方が自邸より長く残ることを、ほとんどの建築家は忘れてはいないか。いつ入居するかわからないのが難点だが、幸い墓石は動産である。墓所が決まっていなくても、墓石だけ早めに準備しておいてはどうだろう。



<参考> 夫婦墓
左：辰野金吾（1919年没）夫妻の墓（1920年、常圓寺）
右：片山東熊（1917年没）夫妻の墓（青山霊園）
最近では「〇〇家之墓」や「〇〇家代々の墓」が一般的で、私の訪ねた建築家の墓もほとんどがそうだった。辰野金吾、片山東熊は今や少数派の夫婦墓で、しかも彼らの墓石の表には戒名ではなく俗名がフルネームで刻まれている。誰の墓かはっきりわかって良い。

街でみかける ファインスチールの施工例 その7



アンジェロブ・ジェルネ

当施設は、長野県飯田市に2010年3月にオープンした結婚式場「アンジェロブ・ジェルネ」。チャペルにはガルバリウムカラー鋼板横葺屋根が使用され、チャペル内のサン・エンペランスは、高さ18mの天井から床まで降り立つアーチが目を引き、ガラス張りの壁面から望む青空と、大理石がバージンロードの絶妙なバランスが神聖な身を包み込んでいます。

南アルプスを一望できる開放的なアルモニ・ガーデンと一体になり、フラワーシャワーやブーケトスなどの場面を演出しています。





2 サロマ湖 ワッカネイチャーセンター

網走国定公園内にある日本最大級の原生花園「ワッカ原生花園」と人々を結ぶ環境保全施設としてオープンした、ワッカネイチャーセンター。琵琶湖、霞ヶ浦に次いで日本で3番目に大きく、汽水湖では日本最大のサロマ湖の真横に建てられている。開館時期は、屋根に雪が残る毎年4月29日から10月の「体育の日」までで、館内にはワッカの自然を知ることが出来るジオラマやビデオ上映のほか、地元の高校生が作成したパネルの展示、休憩所、売店、レンタサイクルなどを完備。公園利用者に対するサービス向上と、保全機能の充実が図られている。なお、車の乗り入れが禁止されたワッカ原生花園には、約4kmの遊歩道が設けられ、散策する手段として取り入れられたレンタサイクルは、保有台数170台で、お客様のニーズに合わせた、乗りやすく疲れない自転車を極力選定している。

建築面積：795.72 平方メートル

延床面積：496.27 平方メートル

仕様：木造平屋建
ガルバリウムカラー鋼板蟻掛け屋根



ファインスチール

めっき技術や塗装技術の飛躍的發展により、
耐久性に優れ、軽くて地震にも強く、
遮音性・遮熱性も増し、リフォームにも適した
亜鉛ベースのめっき鋼板・塗装鋼板の総称です。



禁無断転載